

『金瓶梅』の試み：ある情事の描写より

著者	戸田 聖子
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	14
ページ	57-76
発行年	2009-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/49022

『金瓶梅』の試み—ある情事の描写より—

戸田 聖子

はじめに

明代の長編白話小説『金瓶梅』は、成金の商人にして無類の色事師である西門慶と彼をとりまく人々が、色欲・金銭欲・権勢欲など、現世のありとあらゆる欲望を充足させようとして、日々の暮らしの中であがきうごめくさまを描き、中国の小説史上、今に至るものなお他に類を見ない特異な存在である。

『金瓶梅』には、長らく写本の形で伝わっていたことが原因であろうと推察される単純な筆写の誤りも多いが、話が前後したり、内容上の矛盾がそのままになっていたりするところも多く、また不自然な繰り返しも数多く見られる。それらの錯誤の存在は、ときに集団創作説の根拠とされることもある。集団創作説では、一人の作者が意識的、計画的に執筆した場合、かくのごとき矛盾や重複は存在しえない、ゆえに『金瓶梅』は『水滸伝』などと同じく語り物の集大成であるか、もしくは講釈師や市井の文士などによって語り継がれ書き継がれてきて成立したものである、と主張する⁽¹⁾。

それに対して澤田瑞穂氏は、「長編小説というものは、たとえ作者が単独の個人であっても、着手から完結までに相当の年月を要するから、その間に記述の遺漏や前後の矛盾も続出し、甚だしきは收拾困難に陥って未完成のままに放棄される場合もある」として集団創作説を否定した⁽²⁾。また阿部泰記氏は主な錯誤部分を指摘したうえで、それらの錯誤はいったん出来上がった話を書き改めることなしに付け加えたことによるものがほとんどであるとし、『金瓶梅』が「ある一貫したストーリーを築きあげようとしていることは事実であり、また描かれた人物像も矛盾していないところから見ると、一人の作者の存在を想定せざるを得ないだろう」と結論づけている⁽³⁾。

筆者はかつて『金瓶梅』の表現上の特色の一つである羅列表現に着目して、『金瓶梅』の作者とその親しい友人たちが共に集う、ごく小規模なサロンのような場所を想定し、作者は自ら楽しみ、また友人たちを楽しませるために、身の回りの事物や人、そして彼らがよ

く知る物語や唄などを盛大に織り込んでこの作品を作り上げたのであらうと考えた。そしてそこには、世の中のありとあらゆることがらを面白がり、しかも批判的なまなざしを失わない一人の作者の姿が浮き彫りにされこそすれ、講釈師など雑多な人々の立ち入る余地はなかったであらうと述べた⁽⁴⁾。

本稿では、おおもとのところでの『金瓶梅』個人創作説に立って、西門慶の娘婿である陳經濟と西門慶の第五夫人・潘金蓮の情事の描写に注目し、いまだその名を世に知られていない『金瓶梅』の作者が、『金瓶梅』小説世界の創造のためにどのような試行錯誤を繰り返したか、その跡をたどってみたい。

潘金蓮と陳經濟は十八回において初めて出会い、十九回から五十二回、五十三回、五十五回と、順を追って徐々にその仲を深めていく。二人の情事は七十九回の西門慶の死以後にピークに達し、結局それが発覚したために二人とも西門家を追い出されることになる。この一連の情事の描写には、それ以外の部分と同様、小説として優れた点もあれば、矛盾点、必要な要素の欠落や同一モチーフの安易な繰り返しも見られる。一般に作品の質を問う場合、矛盾や欠落や安易な繰り返しは、もちろんその小説に対する評価を低めることにしなければならないであらうが、こと『金瓶梅』を読む場合について言えば、作者の小説世界構築の痕跡として、それらの諸要素を考察することも重要な作業となってくるのではないだろうか。

なお『金瓶梅』の底本としては、北京図書館旧蔵『新刻金瓶梅詞話』に基づく影印本『全本金瓶梅詞話』（香港太平書局、1982）を使用する。また比較の対象として、必要に応じて北京大学図書館所蔵の影印本『新刻繡像批評金瓶梅』（北京大学出版社、1988）を参照し、比較して論ずる場合は、前者を詞話本、後者を崇禎本と略称することとする⁽⁵⁾。

さてそれでは実際の文章を引きながら、潘金蓮と陳經濟の情事の様子を見てみることにしよう。

一 情事のはじまり（十八回から五十二回へ）

陳經濟は都の実力者楊戩と縁戚関係にあったが、楊戩が都で弾劾を受けることになり、累の及ぶのを恐れて妻の西門大姐と共に妻の実家である山東の西門家へと逃げてきて、そこで西門慶一家と暮らすようになった。西門慶の第五夫人である潘金蓮と陳經濟が初めて顔を合わせるのは、第十八回のことである。

陳經濟扭頸回頭，猛然一見，不覺心蕩目搖，精魂已失。正是五百年冤家，今朝相遇，

三十年恩愛，一旦遭逢。

陳經濟は振り返ってひと目見るなり、思わず心はワクワク、目はチカチカ、頭はボーッとなっていました。「前世からの夫婦の縁」とはこのことでしょう。

金蓮のほうでも、この若者の利発そうなのを見て気に入り、なんとかものにしようとチャンスをうかがう。そしてそのチャンスはすぐにやって来た。次の第十九回には、早くも二人の不義密通のはじまりの場面が設定されている。

惟有金蓮，且在山子前，花池邊，用白紗團扇撲蝴蝶爲戲。不妨經濟悄悄在他身背後觀戲，說道：五娘，你不會撲蝴蝶兒，等我替你撲。這蝴蝶兒忽上忽下，心不定，有些走滾。那金蓮扭回粉頸，斜瞅了他一眼，罵道：賊短命，人聽着，你待死也。我曉得你也不要命了。那陳經濟笑嘻嘻撲近他身來，摟他親嘴，被婦人順手只一推，把小夥兒推了一交。(a) 却不想玉樓在翫花樓遠遠瞧見，叫道：五姐，你走這裡來，我和你說話。金蓮方纔撇了經濟，上樓去了。原來兩個蝴蝶也沒曾捉的住，到訂了(b) 燕約鶯期，則做了(c) 蜂鬚花嘴。

金蓮だけは築山の前の蓮池のそばで、白紗の団扇で蝶々を叩いて遊んでおりました。不意に經濟が後ろからこっそりのぞきこんで、「おかあさま、あなたには蝶々は叩けませんよ。どれ、私が叩いてあげましょう。この蝶々ときたら、上に行ったり下に行ったり、ふらふらしちゃって、ちっとも落ち着きませんねえ」と言いました。金蓮は振り返ってじろりとにらむと、「この死にぞこない、誰かに聞かれたら死ななきゃならなくなるわよ。あんたときたら、どうやら命がいらないらしいわね」とののしります。陳經濟はにこにこ笑いながら近づき、抱きついて唇を押しつけましたが、女に押しのけられて、ひっくり返ってしまいました。思いがけないことに玉樓が翫花樓から遥かに見えて、「五ねえさん（金蓮）、いらっしゃい、いっしょにお話ししましょう」と声を掛けましたので、金蓮は經濟をほったらかして、二階へ上がって行きました。もともとこの二匹の蝶とても、捕まえられなければ“ふうふのちぎり”をしたものを、ただの“くちづけ”だけに終わったのでした。

金蓮が一人でいるところに經濟が不意に現れ、結局は何らかの邪魔が入って行為が中断されるというこのパターンは、この後何度も繰り返される。次は五十二回のシーンである。

惟有金蓮，在山子後那芭蕉深處，將手中白紗團扇兒，且去撲蝴蝶爲戲。不妨經濟驚地走在背後，猛然叫道：五娘，你不會撲蝴蝶，等我與你撲。這蝴蝶就和你老人家一般，有些毯子心腸，滾上滾下的走滾大。那金蓮扭回粉頸，斜睨秋波，對着陳經濟笑罵道：你這少死的賊短命，誰要你撲。將人來聽見，敢待死也。我曉得你也不怕死了，搗了幾鐘酒兒，在這裡來鬼混。

金蓮だけは築山の裏の芭蕉が茂ったあたりで、手に白紗の団扇を持って、蝶々を叩きながら遊んでおりました。そこへ経済が後ろからやって来て、いきなり声をかけました。「おかあさま、あなたには蝶々は叩けませんよ。どれ、私が叩いてあげましょう。この蝶々はあなたと同じですね。毬みたいに気持ちが上がったり下がったり、ちっともじっとしてないじゃありませんか」。金蓮は振り返って流し眼を送り、経済に向かって笑いながら、「この死にぞこないの早死にめ、だれもあんたに叩いてくれないって言ってやしないじゃないの。誰かに聞かれたら、死ななきゃならなくなるわよ。どうやら命がいらならしいわね。酒を飲んだあげく、こんなところまで来てからむなんてさ」とののしります。

この五十二回のシーンを十九回と比較してみると、五十二回の上記導入部においては、十九回とほぼ同一の内容が繰り返されていることが分かる。また、十九回では第三夫人の孟玉楼の邪魔が入って、二人の逢瀬は中断されるが、五十二回ではこの後に新たな情景がいくつか差し挟まれ、分量もかなり多くなる。

因問：你買的汗巾兒怎了。那經濟笑嘻嘻向袖子中取出，一手遞與他，說道：六娘的，都在這里了。又道：汗巾兒稍了來。你把甚來謝我。於是把臉子挨向他身邊，被金蓮只一推。不想李瓶兒抱着官哥兒，并奶子如意兒跟着，從松牆那邊走來。見金蓮和經濟兩個在那裏嬉戲，撲胡蝶，李瓶兒這里趕眼不見，兩三步就鑽進去山子裏邊，猛叫道：你兩個撲個胡蝶兒，與官哥兒耍子。慌的那潘金蓮恐怕李瓶兒瞧見，故意問道：陳姐夫與了汗巾兒不曾。李瓶兒道：他還沒與我哩。金蓮道：他剛纔袖着，對着大姐姐不好與咱的，悄悄遞與我了。於是兩個坐在花臺石上，打開兩個分了。

そこで金蓮は「あんたが買ってきたハンカチ、どうしたの」とたずねます。経済はにこにこ笑いながら、袂から取り出して、片手で女に渡します。「六奥さま（李瓶兒）のもその中にありますよ」。それから、「ハンカチは買ってきましたが、どうやってお礼をしてくれますか」陳経済はそう言うと、顔を近づけましたが、金蓮にぐいと押されてしまいます。思いがけないことに、李瓶兒が官哥を抱き、乳母の如意を従えて、松並木のほうからやって来ました。金蓮と経済の二人がふざけ合って蝶々を叩いている様子は、李瓶兒のほうからはよく見えません。洞の中に二三歩入り込んで、「あなたがた、蝶々を叩いていらっしゃるなら、官哥にも遊ばせてくださいな」と大声を出しました。慌てたのは金蓮です。李瓶兒に見られたのではないかと思って、わざと「陳兄さんはハンカチをくれて？」とたずねます。李瓶兒は、「まだくれませんわ」と答えます。金蓮は「あの人、さっき袂に入れてたんだけど、大ねえさまの前じゃ、あたしたちにくれるのが具合悪くて、こっそりあたしにくれたのよ」

と言います。そこで二人は花壇の石の上に腰をおろして広げ、二人で分けました。

このくだりでハンカチを小道具に使うための伏線は、ハンカチを買ってくるよう女たちが経済に頼むという形で、前もって五十一回に用意してある。十九回では経済はいきなり金蓮に抱きつき唇を押しつけるだけだが、五十二回においては経済の行為をより自然にするために、小道具としてのハンカチを話題にしたやり取りが組み込まれている。しかもその後によって来た第六夫人の李瓶児に対しても、金蓮がハンカチの件を持ち出してごまかし、経済がその場を逃げ出したことから李瓶児の注意をそらすことに成功している。

また、十九回（a）では孟玉樓の視線が二人の行為を中断させる役割を持っていたが、五十二回では次のように、孟玉樓の視線は金蓮と経済の二人にではなく、李瓶児に向けられている。孟玉樓が二階の欄干から見て声を掛けるという十九回のシーンは、五十二回にあっては、李瓶児を金蓮から引き離し、金蓮と経済が先ほど中断を余儀なくされた行為を洞の中で再開できるようにするためのきっかけを作るものとなる。

（d）不想孟玉樓在臥雲亭欄杆上看見，點手兒叫李瓶兒，說：大姐姐叫你說句兒，就來。那李瓶兒撇下孩子，交金蓮看着：我就來。那金蓮記掛經濟在洞兒里，那里又去顧那孩子。趕空兒兩三步走入洞門首，交經濟說：没人，你出來罷。

ところが思いがけなくも、孟玉樓が臥雲亭の欄干のところからそれを見て、手招きしながら李瓶児を呼んで「大ねえさまがあんたにお話があるんですって。すぐにいらっしゃいな」と言うのです。李瓶児は子供を金蓮に頼んで、「わたし、すぐ来るわ」と立って行きます。金蓮は洞の中の経済が気になって、子供のお守りどころではありません。手が空いたのをさいわい、さっと洞の入口に行き、経済に声を掛けます。

「誰もいないわ。出てらっしゃいな」。

経済は口実を設けて金蓮を洞の中に呼び入れ、ひざまづいて先ほどの続きをねだるが、いよいよというところで、今度は李瓶児に頼まれた孟玉樓と女中の小玉が官哥を連れにやって来る。

那小玉和玉樓走到芭蕉叢下，孩子便倘在蓆上，登手登脚的怪哭，並不知金蓮在那里。只見傍邊大黑貓，見人來一滾烟跑了。玉樓道：他五娘那里去了。耶嚟耶嚟，把孩子丟在這里，吃貓誑了他了。那金蓮便從傍邊雪洞兒里鑽出來，說道：我在這里，淨了淨手，誰往那去來。那里有貓來誑了他，白眉赤眼兒的。那玉樓也更不往洞裏看，只顧抱了官哥兒，拍哄着他，往臥雲亭兒上去了。小玉擎着枕蓆，跟的去了。金蓮恐怕他學舌，隨屁股也跟了來。

小玉と玉樓が芭蕉の茂みの下へ行ってみると、坊やはござの上に寝たまま、手足をばたばたさせてひどく泣いております。金蓮はどこへ行ったやら分かりません。見

ると、そばにいた大きな黒猫が、人が来たのを見て、さっと逃げて行きました。玉楼が「五ねえさんったらどこへ行ったのかしら。あらまあ、坊やをほったらかしにするもんだから、猫におどかされたんだわ」と言うと、金蓮はそばの洞から出てきて、「あたしはここよ。おしっこしてたの。どこへも行くもんですか。猫におどかされたなんて、でたらめ言わないでちょうだい」と言います。玉楼も洞の中は見ずに、そのまま官哥を抱き上げ、そっとたたいてあやしながら、臥雲亭のほうへ行きました。小玉が枕とござを持ってついて行きます。金蓮も告げ口されてはたいへんと、その後からくっついて行きます。

置き去りにされた官哥をおどかす役回りで大きな黒猫が登場するが、これは後に、金蓮が自分の飼っている白猫を使って官哥をおどかして死に追いやるシーンの伏線ともなっている。

そして五十二回のこの場面には、最後に以下のような語り手のコメントが加えられる。

原来陳經濟也不曾與金蓮得手做爲 (e) 燕侶鶯儔，只得做了個 (f) 蜂頭花嘴兒。

陳經濟は金蓮とうまく“ふうふ”になることができず、ただ“くちづけ”を一回することができただけでした。

以上、十九回と五十二回に共通するモチーフとして挙げられるのは、「蝶を叩く金蓮」・「後ろから忍び寄る経済」・「ののしる金蓮」・「二人のくちづけ」・「邪魔が入り、経済を押しつける金蓮」などであるが、さらに言えば、それぞれのシーンの最後の部分も、十九回が (b) “燕約鶯期”・(c) “蜂鬚花嘴”、五十二回が (e) “燕侶鶯儔”・(f) “蜂頭花嘴兒”と酷似した表現で終わる。

五十二回はそこにさらにハンカチを使った金蓮のごまかし、李瓶児と官哥の登場と退場、洞で情事を行おうとする二人、などの要素が新たに加えられる。

十九回と五十二回の二つの情事は、類似のモチーフの多さからいって、もとは単一のエピソードであったと考えられる。五十二回のほうが圧倒的に分量が多く、しかも十九回より変化がついて複雑で、エピソードとしてもかなり成功している点から考えて、五十二回のエピソードは十九回のそれをもとにして作られたものという推測が成り立つ。そして、そうであるとするならば、本来重複を避けるために、五十二回のエピソードができた段階で、十九回のエピソードは削除されるべきであったと思われる。にもかかわらず十九回のエピソードがそのまま残っているのは、単なる削除のし忘れなのであろうか、それとも何らかの思惑があって残されたものなのであろうか。

二人の初めての出会いが十八回に設定されているのであるから、会ってすぐによからぬ思いを抱いて、さっそくそれを実行に移す不屈きな二人というものを強調して描きたいと

考えれば、十九回に最初の逢瀬のシーンが置かれるのは妥当である。もっともその方針に沿って十八回の出会いから十九回の逢瀬までを描き、五十二回が存在しないという形を、作者の最初の構想であったと想定してみると、その場合は、十九回の後から五十三回に至るまでの長い間、二人の情事が全く語られないままに放置されることになる。五十二回のシーンが付け加えられても、十九回のシーンが残っている以上、出会いから春情をもよおすまでのスピードに比し、二人の仲が次の段階へ行くまでの間が空きすぎるということについてはさほど変わりはない。どちらにせよ、再開される二人の濡れ場には、どうしても唐突さがつきまとう。

十九回のシーンを削除して、五十二回から二人が急激に接近していく形にすれば、その後五十三回、五十五回と加速度をつけて深まってゆく二人の仲は、読者の目に自然に映るであろう。その代わり、その場合は、最初からお互いが強く惹かれ合っていたという前提である十八回での出会いのインパクトが弱くなるのは、ある程度やむを得ないところである。

そう考えてみると、この二案はどちらも何かしら捨てがたい要素を含んでいると言えよう。作者は相前後して二つの叙述のパターンを構想し、その二つの選択肢の間で迷い、そのために、五十二回のエピソードを完成させて物語に組み込んだ後も、最初の構想で必要であった十九回のエピソードを削除しそびれたと考えても、さほど無理はないように思う。もちろん、作者の死など、よんどころない事情による中断が原因である可能性もある。最終的に吟味して一番いい形を選択する前の、構想途中の状態がそのまま残っていると考えられる。

ちなみにこの十九回と五十二回を、詞話本を改訂したものと考えられる崇禎本ではどのように扱っているかを見てみると、崇禎本の十九回は、わずかな語句の変更以外は詞話本そのまま、ほとんど手が加えられていない。

五十二回については、崇禎本が改めたのは、導入部の蝶を叩いて遊ぶというモチーフである。十九回・五十二回と完全に同一のモチーフが繰り返されているものであるから、十九回のシーンを削除しないのであれば、ここでこれを改めるのは妥当な作業である。崇禎本ではこれを除き、蝶を叩く代わりに金蓮には庭の花を愛でさせることにし、経済には「足元が滑りやすいから心配だ」という口実を使わせて接近させている。また、李瓶児が彼らに近づく際にも、詞話本では李瓶児がやみくもに洞をのぞき込んで声を掛ける形になっているが、崇禎本では、以下のように変更が加えられている。

不想李瓶兒抱着官哥兒，并奶子如意兒跟着，從松牆那邊走來。(g) 見金蓮手擎白团扇一動，不知是推敬濟⁽⁶⁾，只認做撲蝴蝶，忙叫道：五媽媽，撲的蝴蝶兒，把官哥兒

一個要子。慌的敬濟趕眼不見，兩三步就鑽進去山子裏邊去了。潘金蓮恐怕李瓶兒瞧見……。

意外にも李瓶児が官哥を抱きながら、乳母の如意を後に従えて、松並木の方からやって来ました。金蓮の手にした白団扇がひらりと動いたのを見て、それが経済を押ししたものとは知らず、蝶を叩いたものと思って、いきなり「おばちやま、蝶々を叩いていらっしゃるの。官哥にも遊ばせてくださいな」と声を掛けました。慌てたのは経済、後も見ないでさっと築山の洞にもぐりこみます。潘金蓮は李瓶児に見られたのではないかと思って……。

確かに、詞話本においては、経済がいつどうやって洞にもぐりこんだかが描かれておらず、また二人は外で蝶を叩いているはずなのに、李瓶児は洞をのぞきこんで二人に声を掛けているなど、不自然な部分が多少存在する。

崇禎本では、下線部（g）のように、導入部で削除した蝶叩きのモチーフを、白団扇の動きとからめて、李瓶児の誤解を誘うのに使い、李瓶児に声を掛けられて慌てた経済が洞にもぐりこんで身を隠したものとし、その後、口実を設けて金蓮を洞に連れ込むまでの流れを自然なものにしている。

重複を避けて、矛盾を解消し、大きな変更を加えずに、できるだけ自然な筋書きを作ろうという崇禎本の努力は、ここではかなり成功していると言っていいだろう。

二 繰り返される情事（五十三回から五十五回へ）

次に五十三回で描かれるのは、五十二回で二人の行為が未遂に終わったその翌日のことである。

却說那潘金蓮在家，因昨日雪洞裡不曾與陳經濟得手，此時趁西門慶在劉太監庄與黃主事、安主事吃酒，吳月娘又在房中不出來，(h) 奔進奔出的，好像熬盤上蟻子一般。さて、うちでは潘金蓮、昨日洞の中で陳経済としとげなかったものですから、今日は西門慶が劉太監の下屋敷で黄主事・安主事と酒を飲んでいるのをさいわい、それに吳月娘も部屋に閉じこもったまま出てこないの、飛び出したり飛び込んだり、まるで熱い鍋の中の蟻のようなありさまです。

夕方、あたりが暗くなってくると、二人にチャンスが訪れる。金蓮と経済は早速、前の日の続きに取りかかる。

金蓮躡足潜踪，貼到捲棚後面。經濟三不知走來，隱隱的見是金蓮，遂緊緊的抱着了，

把臉子挨在金蓮臉上，兩個親了十來個嘴。經濟道：我的親親，(i) 昨夜孟三兒那冤家打開了我每，……。

金蓮はぬき足さし足、数寄屋へと忍び寄ります。そこへ経済が不意にやって来て、かすかに金蓮の姿を認めると、ひしと抱きしめて、顔を金蓮の顔に近づけ、二人は十遍あまりもくちづけをしました。経済は言います「ねえ、あなた。昨夜は孟家の三番目が僕たちの仲を裂くもんだから…」。

五十三回のこのくだりでは、この後かなりきわどい性描写がなされるが、いざ本格的にことに及ぼうという段になると、今度は外で犬が吠え出し、西門慶が帰って来たと思った二人はまたしてもあわてて逃げ出す。

五十三回 (i) で経済の言う「孟家の三番目」とは、第三夫人である孟玉楼のことであり、五十二回で、二人は孟玉楼に邪魔されて行為を中断させられているので、この言葉は一見何の矛盾もなさそうに見える。しかし、よく考えると、前日の出来事は昼間の話であるから、ここで「昨夜は…」と言っているのはおかしい。

崇禎本でもこの矛盾に気がついたらしく、ここの経済のセリフを“起先吃孟三兒……”と言いかえて、五十二回のエピソードと矛盾なくつながらるようにしている。だが、詞話本の「昨夜」は崇禎本が書き換えたような単純な筆写の誤りなのであろうか、それとも実は前の晩にも、直接孟玉楼に邪魔されるような出来事が別に想定されていたのであろうか。

この件についての手がかりは全くないが、詞話本ではこの後の五十五回にも、金蓮が「二人で部屋にいるところを、女中の小玉におどかされて以来会えなくなった」と言っている(k)にもかかわらず、それに該当するエピソードがどこにも存在しない、という状況がある。どこかへ行ってしまった「小玉におどかされた」エピソード同様、もしかすると五十三回のシーンの前夜にももうひとつ、今は消えてしまったエピソードがあったのかもしれない。

五十三回に佳境にさしかかったところで中断を余儀なくされた二人は、懲りずに五十五回でも逢瀬を重ねる。五十五回まで来ると、すでに経済よりも金蓮のほうが積極的になっており、なりふり構わず経済を求め、情欲に身をまかせようとする、あられもない金蓮の姿が描かれる。

自從西門慶往東京慶壽，姊妹每眼巴巴望西門慶回來，多有懸掛。在屋里做些針指，通不出來閒耍。只有那潘金蓮，打扮的如花似玉，嬌模喬樣，在丫鬢夥裏，或是猜枚，或是抹牌，說也有，笑也有，狂的通沒些成色，嘻嘻哈哈，也不顧人看見。只想着陳經濟勾搭，便心上亂亂的焦燥起來，多少長吁短嘆，托着腮兒呆登登。本待要等經濟回來，和他做些營生，又不道經濟每日在店里沒的閒，欲要自家出來尋着他，又有許

多丫頭，往來不方便。日里便 (j) 似熬盤上蟻子一般，跑進跑出，再不坐在屋里。

西門慶が東京へ誕生祝いに出發してからというもの、姉妹たちは西門慶の歸りを今か今かと待ちかね、みんな心配しております。部屋で針仕事などして、全然外へ遊びに出たりしません。ところが潘金蓮だけは、花とも玉とも見まごうほどにあでやかにめかしこみ、女中たちにまじっては、猜枚をしたりカルタをしたり、しゃべったり笑ったりして、その狂態は見るに忍びないほど、ケラケラふざけて笑い、人の目などおかまいなしです。ただひたすらに陳經濟との逢ひ引きを考え、心は千々に乱れて、イライラしていたかと思うと、ため息に頬杖でボンヤリとしたりしております。經濟が戻ったら一仕事してやろうと待ちかねているのですが、經濟は毎日店で忙しく、こちらから出發して行ってさがそうと思っても、女中たちが大勢行ったり来たりするので都合が悪く、昼間はまるで熱い鍋の中の蟻のように、飛び出したり飛び込んだりして、ちっとも部屋にはじとしておりません。

ついに待つのに耐えられなくなった金蓮は、女中の春梅を使いに出し、經濟に手紙を届けさせる。受け取って中を見るとそこには唄が一首書かれていて、それを見た經濟は仕事もほったらかして金蓮のもとへ駆けつける。

兩個遇着，就如餓眼見瓜皮一般。禁不的一身直鑽到經濟懷里來，捧着經濟臉一連親了幾個嘴，咂的舌頭一片聲響，道：你負心的短命賊囚。(k) 自從我和你在屋里，被小玉撞破了去後，如今一向都不得相會……正在熱鬧間，(l) 不想那玉樓冷眼瞧破。忽然抬頭看見，順手一推，險些兒經濟跌了一交，慌忙驚散不提。

二人は会ったとたん、餓鬼が瓜の皮を見たときのようなありさま。(金蓮は) 我慢できずに經濟の懷にからだごとしがみつки、顔を持ちあげると続けざまにいくつものくちづけ、吸われて舌は音をたてます。「この情け知らずの、早死にの悪党め。あんたと二人で部屋にいるところを、小玉におどかされてからこっち、ずっと会うこともできやしない…」…そう言ってしきりにいちゃついていましたところ、思いがけないことに玉樓の冷たい目がじっと見ているではありませんか。金蓮はふと顔を上げてそれを知ると、はずみに經濟をぐいと押したものですから、あやうく經濟はひっくり返りそうになりました。二人は慌てふためいて逃げ去りました。

小玉におどかされたくだりがこれ以前に存在しないことについては、前述したとおりである。崇禎本ではこの矛盾を解決するために、五十四回に二人の逢瀬をもうひとつ設定し、その最中に女中の小玉が近くを通りがかったのですばやく離れた、という一段を新たに挿入している。しかし何か手違いでもあったのか、それとも別々の人間が手直しの作業を行ったのか、この一段の挿入が必要となった原因である五十五回の金蓮のセリフ「あんたと

二人で部屋にいるところを……」(k)を崇禎本では省いているので、結果的に五十四回で逢瀬をひとつ増やした意味がなくなってしまう。

また、金蓮が経済を求めて、落ち着かなげに部屋を出たり入ったり、うろうろするさまを描くのに、五十三回(h)“好像熬盤上蟻子一般”、五十五回(j)“似熬盤上蟻子一般”と「熱い鍋の中に入れられた蟻」という同じ喩えを使用しているが、これもどちらかが削除されるべきであったものであろう。おそらくは五十五回に置かれたほうが、より焦燥感を強める効果があったかもしれない。これも断片的にはあるが、作者の迷いが残存してしまったものと判断できよう。

ちなみに崇禎本では、五十三回のこの喩えを“也十分難熬”(ひどく耐えがたい)に置き換え、五十五回では全て削除して、採用すること自体をやめている。崇禎本の五十五回では、落ち着かない二人の様子だけを描き、なかなかチャンスをつかめず会えない、と言うだけにとどめ、詞話本のような濡れ場は描かれない。これは「小玉におどかされた」濡れ場のくだりを五十四回に新たに設定したので、増えたその分をここで削ってつじつまを合わせたということでもあろうか。

さらに言えば、五十五回で金蓮から経済へ届けられる手紙の中の唄一首についてだが、内容について全く触れられていないのは妙である。こういった唄のたぐいを文中にはさみこむチャンスを『金瓶梅』の作者はめったなことでは逃さない。たとえストーリーの流れを止めてでも、どんなに不自然な場面であっても、それこそ臨終の床に伏す瀕死の者になっても、場違いな唄を朗々と歌い上げさせようとするのが『金瓶梅』の作者である⁽⁷⁾。そういった作者にとっては、金蓮から経済へもたらされた恋の唄、しかもそれを一目見たとたんに経済が金蓮のもとへ駆けつけるような恋の唄を文中に記さないことのほうが不自然である。後で補うつもりでいて、忘れられてしまったものであろうか。これも欠落のひとつに数えてよいであろう。

二人の情欲が一段と高まる様子が描かれる五十五回であるが、その中で今回も二人の行為を中断させる役割を果たすのは孟玉楼である。十九回、五十二回、五十五回と、これですでに三度も同じ人物によって邪魔をされているわけで、それだけでもずいぶんと不自然に感じられるが、五十五回(l)における玉楼の出現は、何度も不用意に使いまわされることによる不自然さの他にも、玉楼がどういう理由で、どこから彼らを見ているのかが全く描かれないがために、十九回、五十二回での出現に比べてその必然性が伝わらず、彼女の出現が金蓮と経済にとって以上に、読者にとってもひどく唐突に感じられる。

ただ、五十五回における玉楼の登場は、ストーリーの運びという点で成功しているとは言いがたいが、この“冷眼瞧破”(冷たい目で見つめる)という表現には、玉楼の感情が込

められているように感じられる点が、今までの類似のモチーフには存在しなかったところである。“冷眼瞧破”という表現で、玉楼が二人を見つめる視線には、はっきりと批判的な意味合いが込められた。五十五回に至って、玉楼の視線に冷たく批判的な意味合いが込められたことにより、さかのぼって十九回の一見何気なく無意識に見えた玉楼の“遠遠瞧見”（遠くからはるかに見る）という行為にも、別の含みが生まれる。玉楼は十九回の時も、もしかすると、ただ見ていただけではなかったのかもしれないと思わせる含みである。玉楼は、ずいぶん早い段階から二人の仲に気づいていながら、それを決して口には出さず、心に秘めたまま、遠くから二人の痴態を冷たくじっと見つめていたのではないか、と思わせるものが、この唐突な“冷眼瞧破”には存在する。そしてそのようにふるまう玉楼には、なにやら底知れぬ不気味ささえただようのである。

十九回を書き改めたとされる五十二回のシーンでは、孟玉楼が遠くから見つめるのは李瓶児とされ、二人の情事を「見る人」としての孟玉楼の役割は存在しない。ここでもまた、はっきりと孟玉楼に「二人の情事を見つめ、それを中断させる」という役割を持たせようとした十九回から五十五回と、ストーリーの自然な流れのほうを重視して、孟玉楼が「二人を見る」ことにこだわらなかった五十二回の違いが見て取れ、その二つの選択肢を共に残した作者の、構想上の迷いが見て取れる。

三 孟玉楼という女

五十五回の「孟玉楼が不義をはたらく二人を冷たく見つめる」情景は、結果的に断片だけのものになり、物語の流れにうまく組み入れることはできずに、ただ単に二人の仲を中断させるという役目を果たしただけであった。しかしその断片的な記述からは、作者が孟玉楼という作中人物に与えようとしていたもうひとつ別の役割が、かすかにうかがえる。

この『金瓶梅』小説世界において、西門慶の第三夫人である孟玉楼は、明らかにわき役である。『金瓶梅』というタイトルが、潘金蓮の「金」、李瓶児の「瓶」、春梅の「梅」にちなんでつけられていることから分かるように、登場する多くの女たちの中で、物語の中心に据えられるのは、潘金蓮・李瓶児・春梅の三人であり、孟玉楼はおおむね潘金蓮の引き立て役的なポジションにることが多い。温厚な常識家であり、『金瓶梅』に登場する女性の中でいちばん性格的にバランスがとれていると評される⁽⁸⁾孟玉楼は、自らの激しい欲望に押し流されるようにして身を滅ぼしていく第五夫人の金蓮や、西門慶の子を産みながらも、金蓮によって我が子官哥ともども死に追いやられる第六夫人の李瓶児などのような

ドラマは用意されていない。西門家における彼女の役割は、多くの場合潘金蓮のとめどないおしゃべりと悪口の聞き役であり、また女たち、もしくは女たちと西門慶の間に何らかのトラブルが生じたときに、それを鎮静化させるための調停役といったところである。

そもそも、玉楼は西門慶の第三夫人という身分であるにもかかわらず、西門慶との情事が描かれない。生真面目で面白味がない人物として描かれる正妻の呉月娘にさえ、西門慶との情事のある場面があるというのに、玉楼と西門慶の情事の描写は、ほとんど存在しないのである。もちろん、西門慶の妻妾の中で、情事が描かれない女は他にもいる。第二夫人の李嬌児、第四夫人の孫雪娥も共に西門慶の情事の相手として描かれることはない。しかしこの二人は物語が始まった段階ですでに西門家に属しており、新たに西門慶と出会ったわけではないので、特に物語の展開上必要がなければ、その情事が描かれる必然性もない。ところが玉楼は物語の初めの段階で、しかも最重要人物の金蓮と西門慶の仲を一時邪魔する存在として登場している。金蓮と出会って間もなく、西門慶が孟玉楼を娶り、しばらくそちらにかかりきりだったために、金蓮がほったらかしにされていた時期があるのだ。そんないきさつがあるというのに、蜜月だったはずのその孟玉楼との情事は全く描かれないのである。玉楼と西門慶が褥を共にする場面が描かれるのは、西門慶との暮らしも終盤近く、第七十四回に一度あるのみ（西門慶は第七十九回に至り死亡）だが、それも情事を描くというよりは、体の不調を訴える玉楼と、それをなだめすかして機嫌を取ろうとする西門慶のやり取りが主であって、実際の情事のある場面はほんのめかし程度に終わっている。

つまり玉楼には、西門慶の情事の相手としての役割は最初から付与されていないのである。情事の相手としての役割を免除されることによって、玉楼は人一倍嫉妬深い金蓮に敵愾心を抱かれずに傍にいろことができるようになった。こうして作者は玉楼にまず金蓮の話相手としての役割を与え、自らの才覚によって作品世界を生き延びる運命を与えた。

玉楼の性格と運命をはっきりと明記している場面は二ヶ所あり、どちらも占い師が西門家を訪れ、一人ひとりを占うという形をとって描かれる。占いの言葉は、いわば小説世界における神である作者が、占い師の口を借りて語る作中人物の人生の設計図といってよいであろう。

まず二十九回では、呉神仙と呼ばれる占い師が西門家の女たちを占ってみせるのだが、その中で孟玉楼は次のように占われる。

這位娘子三停平等，一生衣祿無虧，六府豐隆，晚歲榮華定取。平生少疾，皆因月孛光輝。到老無災，大抵年宮潤秀。

この奥さまは三度平等に停まり、一生衣祿に不自由せず、六腑豊かに榮え、晩年は必ず榮華を得られます。平素より病気が少ないのはみな月孛が光り輝くためです。

老年になっても災いのないのは、大抵年宮が潤い斐いでいるためでございます。

玉楼は三度嫁ぎ、一生涯生活に困ることはなく、身体は健康で、しかも晩年は栄華を我がものとする運命にあるという。そしてこの設計図通りに、玉楼は西門慶亡きあと、金持ちの若様に見染められて、没落していく西門家を去り、三度目の結婚を果たす（玉楼は西門慶の第三夫人になる前、呉服屋の未亡人であった）。

四十六回には、亀占いの婆さんが西門家の幾人かを占う一幕がある。そこで孟玉楼の姿は次のように表現される。

你爲人柔和氣，好個性兒。你惱那個人也不知，喜歡那個人也不知，顯不出來。一生上人見喜下欽敬，爲夫主寵愛。只一件，你饒與人爲了美，多不得人心，命中一生替人頂缸受氣，小人駁雜，饒吃了還不道你是。你心地好了去了，雖有小人也拱不動你。あなた様はお人柄がやさしく穏やかで、まことによいご気性ですが、誰を怒っているかもわからず、誰を好いているかもわかりません。はっきりと外には現れないのでございます。一生涯、上の人からは喜ばれ、下の者からは敬われ、ご主人からかわいがられますが、ただ一つ、あなた様は人のためにずいぶんよいことをなさっても、人の心をつかむことができず、一生人の罪を着て苦勞なさる。小人どもは下劣で、さんざん利用しておきながら、あなた様のことをよくは申しません。でも、あなた様のご気性がよろしいので、小人どももあなた様をどうすることもできないのでございます。

玉楼は「誰を怒っているかもわからず、誰を好いているかもわか」らないのだという。玉楼が誰を好きでも、誰を嫌っていても、彼女のそういった感情は表にあらわれないというのだ。その前の部分で言う「お人柄がやさしく穏やかで」というのが真実であるにせよ、人に対する好悪の感情を表に出さない女などというものが、ただの温厚な善人であるわけがない。玉楼はわき役ではあっても、一筋縄ではいかない人物であるらしいということが、ここからはうかがわれる。主役の金蓮が常に好悪の感情をむき出しにして周囲とトラブルを引き起こすのとは、歴然と対照的である。

そして、控え目でありながら、要領の良さ、悪く言えばずる賢さも十分にあわせ持っている孟玉楼は、さりげない行為や会話の中に、ときに思いもよらぬ凄みを見せ、読者を驚かす。

孟玉楼がただものでないことについては、かねてより指摘されているところである。たとえば高橋文治氏は、以下の第二十五回の場合を例にとって、玉楼の性格の底知れなさを示して見せる⁽⁹⁾。二十五回では、西門慶が下男的女房に手をつけ、それを知った下男が、酒に酔った勢いで、西門慶を殺してやると騒いだため、心配した金蓮と玉楼がそのことに

ついて話し合っている。

玉楼向金蓮道：這庄事咱對他爹說好，不對他爹說好。大姐姐又不管，倘忽那厮真個安心，咱每不言語，他爹又不知道，一時遭了他手怎的。正是有心籌無心，不備怎隄備。六姐，你還該說說。

玉楼は金蓮にこう言った。「この事、わたしたち、旦那さまに言った方がいいかしら、言わない方がいいかしら。大ねえさまは相手になさらないでしょうね。もしあいつが本当にその気になったりしたらどうするの。わたしたちが言わなきゃ、旦那さまだっでご存じないし。うっかりあいつの手にかかったりしたら大変じゃない。備えあれば憂いなしよ。ねえさん、あなた、やっぱり、言わなくちゃいけないわよ」。

玉楼は、ことの重大さを金蓮に語りながら、金蓮が西門慶に告げ口をするよう、さりげなく仕向けていく。はじめは“咱”・“咱每”（わたしたち）と言っていたものが、いつの間にか最後には“你”（あなた）になっている。この巧みなすり替えによって、危ない橋は金蓮ひとりに渡らせ、自分を安全な場所に置くことに成功しているのである。

かくのごとき性格づけをされた玉楼が、何も言わずに金蓮と経済の痴態を遠くからじっと見すえている。登場人物も作者も、ときに不必要なほど饒舌なこの『金瓶梅』世界の中で、沈黙する玉楼は異質である。玉楼はもちろん、本来決して無口なわけではない。上記二十五回のシーンをはじめ、わき役ながら、玉楼が大いに語り、精力的に活躍する場面は多々ある。特に、妾たちから金を集めて宴会を開く、というような実際的な場面⁽¹⁰⁾や、金蓮と冗談を言ってふざけ合う場面⁽¹¹⁾などにおいて、玉楼は他を圧倒する饒舌ぶりを発揮する。それだからこそ、この場面での玉楼の沈黙の視線には、何か特別な意味づけがなされる可能性があったのではないかと思われてならない。なぜなら、西門慶の死後、再々婚を果たした玉楼には、最後にもう一度、主役級の活躍の場が残されていて、それが、金蓮と経済の情事に関連してくるからである。

西門慶が死に（七十九回）、金蓮もすでにこの世になく（八十七回）、西門家は没落の一途をたどっているが、玉楼は新しい夫と幸せに暮らしていた。ある日、その玉楼の嫁ぎ先に、突然陳経済が実の弟と身分を偽って訪ねて来る（九十二回）。西門家を追い出された経済は、玉楼が再々婚を果たして裕福な暮らしをしているという消息を耳にして、よからぬことをたくらむ。経済は以前西門家の庭で拾った玉楼の簪をまだ持っていた。この簪は、当時金蓮がそれを見て、玉楼と経済の間に何かあるのではないかとやきもちを焼き、ひと悶着あった⁽¹²⁾いわくつきのものである。さらに言えば、かんざしには、玉楼の名の元となった詩⁽¹³⁾が刻まれていて、いわば玉楼の存在そのものを象徴するような代物であった。経済はこれを使って、玉楼と自分の間に不倫の関係があったという話を捏造し、それをもと

に玉楼を強請って、何がしかおいしい思いをしようたくらんでやって来たのである。玉楼は、いったん経済の言うことを聞くふりをして信用させ、裏で夫に全てを打ち明け、のこのこやって来た経済を捕まえて役所に突き出させる。

この事件では、経済はもちろん卑劣極まりないやくざな男として描かれるが、同時に玉楼の情け容赦のないやり口も印象的である。玉楼は経済の出現にうろたえることなく、臨機応変に対応して、みごと経済をだましてみせる。西門慶のミニチュア版ともいえる陳経済のめまぐるしい転落の人生が始まるきっかけとなるのが、玉楼とのこのエピソードなのであるが、この事件の前提として、玉楼がかねてより経済という男の本質を知悉しており、決して口には出さなかったが、ころよくは思っておらず、彼女にとって経済は用心すべき人物であったという認識があったとすれば、玉楼の沉着冷静な行動にもより説得力が増す。そして、十九回と五十五回に現存する、金蓮と経済の痴態を見据える玉楼の視線は、断片的ではあるが、その前提条件につながるはずのものだったように思われる。

四 陋儒の筆と八十回以降

明代の著名な文人である沈徳符は、その著書『万曆野獲編』第二十五巻において、『金瓶梅』の原本は五十三回から五十七回までを欠いていて、陋儒（学識の浅い知識人）が補ったが、浅薄低俗なのはもちろん、時々呉語が混じり、前後の脈絡も一貫しておらず、一見して偽物とわかるものであったと述べている⁽¹⁴⁾。

今我々が目にすることのできる明代の刊本は、『新刻金瓶梅詞話』（詞話本）と『新刻繡像批評金瓶梅』（崇禎本）のみである。崇禎本は基本的には詞話本を改訂したものと考えられるので、現存する最も古い刻本は詞話本ということになるが、現存詞話本が、沈徳符の言う『金瓶梅』と同一のものかどうかは、現在のところ判然としない。ゆえに、その五十三回から五十七回が本当に原作と違って浅薄低俗な内容であったのか否か、もしそうだったとして、それは現存する詞話本の該当部分と同一のものであるのか否か、などについてもすべて判断が難しい。

不明な点は多いが、何らかの形で外部の手が入った可能性は、他の部分よりもこの五回において高いことは確かである。そして、本稿で検討してきた金蓮と経済の情事の描写のうち、五十三回と五十五回がこの五回の中に含まれている。

五十五回において二人を見る玉楼の視線が唐突で断片的なものであり、ストーリーの中にうまく生かされていないように見えることを、一概に陋儒のせいにはすることはできない

が、別人の筆が原作者の意を十分にくみ切れなかった可能性は、全くないとは言いきれない。

また、西門慶の死（七十九回）を境に、叙述がにわかに簡略になり、作品のタッチが変化することについては、多くの指摘がある⁽¹⁵⁾。八十回以降、あれほど克明であった描写の筆づかいが雑になり、作中人物の会話や細やかな心理描写も減り、ひたすら話を先へ進めようとして急ぐようになる。終末に向かってしゃにむに突き進んでいくような印象を受ける。作者が物語をつむぐ情熱を失ったのだらうとする説もあれば⁽¹⁶⁾、別人物が筆をとったのであらうとする説もある⁽¹⁷⁾。

経済が玉楼を陥れようとして嫁ぎ先を訪れ、逆にしてやられる場面は九十二回であるから、このエピソードは八十回以降の大きな変化の真ただ中に存在する。作者の内部の変化であるにせよ、誰か他の者が筆をとったにせよ、主人公でもない孟玉楼の心理を以前の出来事にまでさかのぼって丁寧に描こうという意欲はすでになくなっていたのであらう。九十二回で、経済が訪れた当初、玉楼が経済を警戒しているような心理は全く描かれず、それどころか、抜け目のないはずの玉楼が、ずいぶんと人の良い、愚かな女のようなセリフを言わされている。

常言親不親、故郷人、美不美、郷中水。雖然不是我兄弟，也是我女婿人家。

「ことわざにも、故郷の人ならみな懐かしく、郷里の水ならみなうまいというし。

弟ではないけれど、婿さんにはちがいないわ」。

善良そうなこのつぶやきの直後に、玉楼は経済の本性を知る。するとなんともすばやく経済を受け入れるふりをし、二人は抱き合い、くちづけまでかわすのである。ここでの玉楼は、善良で愚かな女と抜け目のない賢い女というふうに、前後の性格の振りが大きく、いささかキャラクターが定まっていらないような印象を受ける。

八十回以降の大雑把な話の流れと、五十三回から五十七回の外部の手になる可能性を考えてみると、これらの事情と、十九回と五十五回で孟玉楼の視線が断片としてしか扱われていないこと、それから九十二回での彼女のキャラクターが定まっていらないように見えることの間に何らかの関係を推測することも、あながち不可能でもないと思われる。

玉楼の視線が、十九回と五十五回において効果的に伏線として配してあったならば、九十二回において、人の良い、思いやり深い玉楼を描いた直後に、沈着冷静に経済を毟にはめる玉楼へと急激なキャラクターの転換をする必要はなく、エピソードの始まりのところから、経済に対して用心を怠らない、冷静で賢い玉楼が描かれた可能性は高いのではないだろうか。そして、そのような描かれ方のほうが、玉楼に付与された性格と役割には、よりいっそうふさわしかったのではないだろうか。

おわりに

潘金蓮と陳經濟の不義密通の描写に含まれる繰り返しや欠落や矛盾の多くは、作者の構想として、いくつかの選択肢がある中で、どれを選ぶかという最終的な決定がなされずに、エピソードやモチーフがそのまま放置されてしまったものがほとんどであると言ってよいだろう。その多くが、検討の途中としか思えない状態で残されている。何らかの事情により、作者は途中で作業を放棄している。

崇禎本ではそれを補ってつじつまを合わせようとさまざまに手を入れているが、その改訂作業は、ある程度成功したものもあれば、中途半端に終わったり、読みが浅くてかえって逆効果に終わっているものもある。崇禎本の改訂は、功罪相半ばするといったところであろうが。

そしてその中で、何度か繰り返し出現してくる孟玉樓の視線は、詞話本でも崇禎本でも断片のまま取り残され、物語の流れの中に効果的に組み入れられているとは言えないが、実はもっと重要視されてしかるべき要素を含んでいたのではないと思われる。

筆者は『金瓶梅』の羅列表現について論じた際、特に女たちの姿を見つめる主人公・西門慶の視線は、多くの場合物語をつむぎ出す作者の視線と一体化し、さらに読者の視線とも重ね合わされて、一種独特の物語世界の雰囲気を作り出しており、彼らの視線を追いながら、主人公と作者と読者が共に小さな鍵穴から人々の生活をのぞき見るような読み方こそが、『金瓶梅』という小説の読み方としてふさわしいものであると考えた⁽¹⁸⁾。

また田中智行氏は、『金瓶梅』において作者が、人物の感情を描写する際に、意識的に室外からの視線を描き足すことによって、その場面の雰囲気を読者にも体感させようとしている、と論じている⁽¹⁹⁾。そういった手法が『金瓶梅』の中で意識的かつ普遍的に行われているのであれば、ここで述べてきた金蓮と經濟の情事を見つめる玉樓の視線もまた、その一例として挙げることができるかもしれない。

『金瓶梅』において「視線」という要素はかくのごとく重要である。『金瓶梅』における「視線」が、さまざまな場面でどういう使われ方をし、どういう効果をもたらしているかについては、今後さらなる調査と検討が必要となるであろう。

誰にどういう感情を抱いているか、人に悟られることのない、自制のきいた聡明な女として性格づけられた孟玉樓は、もちろん何も言わない。金蓮と經濟の痴態を、はるか遠くの高みからただ黙って冷たく見おろしているだけである。はるかな高みからの視線は、神の視線である。冷たいまなざしは、審判者のそれであろう。孟玉樓はこの瞬間、作者と共

に審判者となり、小説世界の神となる。そして読者もまた、読書という行為の中で、一方ではきわめて下世話な興味を持って金蓮と経済の情事をのぞき見ながら、同時に、玉楼と共に愚かな男女の不義密通のさまをはるか遠くの高みから見下ろし、その行為を裁く神ともなることができるのである。

小説を読むことの醍醐味のひとつがここにはある。

注

- (1) 潘開沛「《金瓶梅》の産生和作者」(『光明日報』1954→『論金瓶梅』文化芸術出版社、1984再録)、徐朔方「《金瓶梅》の写定者は李開先」(『杭州大学学报』1980→『金瓶梅研究』復旦大学出版社、1984再録)、劉輝「從詞話本到說散本—金瓶梅成書過程及作者問題研究」(『金瓶梅成書与版本研究』遼寧人民出版社、1986)など多数。
- (2) 澤田瑞穂「『金瓶梅』の研究と資料」(『中国の八大小説』平凡社、1965)
- (3) 阿部泰記「『金瓶梅詞話』の叙述の混乱について」(『小樽商科大学人文研究』58、1979)
- (4) 拙稿「『金瓶梅詞話』考—羅列表現を手がかりとして」(『東北大学中国語学文学論集』第6/7合併号、2002)
- (5) 現存する『金瓶梅』の明刊本は二種類あり、一つは欣欣子の序と万暦45年(1617)の東吳弄珠客の序を持つ『新刻金瓶梅詞話』であり、一般に「詞話本」と呼ばれる。もう一つは『新刻繡像批評金瓶梅』で、崇禎年間に刊行されたために「崇禎本」と呼ばれる。
- (6) 崇禎本では「陳經濟」を「陳敬濟」としている。
- (7) 『金瓶梅詞話』第七十九回、西門慶の臨終の場面では、今まさに死にゆく西門慶と正妻の呉月娘が唄で応酬する。
- (8) 日下翠『金瓶梅—天下第一の奇書』(中央公論社、1996)
- (9) 高橋文治「もう一つの『金瓶梅』論」(『中国四大奇書の世界』和泉書院、2003)
- (10) 『金瓶梅詞話』第二十一回、仲違いしていた西門慶と正妻の呉月娘が、ふとしたことから仲直りし、それを知った妾たちが、自分たちで金を出し合って宴会を開くことにした。孟玉楼は率先して金を集めてまわり、宴会の手配を行う。
- (11) 『金瓶梅詞話』第四十回、ふざけて女中の格好をした潘金蓮に調子を合わせて、孟玉楼もわざと潘金蓮を女中扱いして、皆の前でからかう。
- (12) 金蓮が玉楼の簪を見つけてやきもちを焼く場面は八十二回にある。
- (13) 「金勒馬嘶芳草地 玉楼人醉杏花天」(金勒の馬は嘶く芳草の地、玉楼の人は酔う杏花の天)。同じ詩が彫られた玉楼の簪による類似のエピソードが第八回にも存在する。第八回では、西門慶が持っていた玉楼の簪を、誰か歌い女から貰ったものと勘違いした金蓮が取り上げるという場面が描かれる。そのときの簪が再び使われたのか、別の似たようなものなのかは明記されていないが、これも安易な繰り返しのひとつであろう。
- (14) 沈德符『萬曆野獲編』第二十五卷

「然原本實少五十三回至五十七回，遍覓不得，有陋儒補以入刻，無論膚淺鄙俚，時作

呉語、即前後血脈、亦絶不貫串、一見知其贋作矣。」（然れども原本は實は五十三回より五十七回に至るまでを少き、遍く覓すも得ず、陋儒の補い以て刻に入る有るも、膚淺鄙俚を論ずる無く、時に呉語を作し、前後の血脈に即いても亦た絶えて貫串せず、一見して其の贋作たるを知る。）（『金瓶梅資料彙編』黄霖編、中華書局、2003 による）

- (15) 澤田瑞穂『『金瓶梅』の研究と資料』（『中国の八大小説』平凡社、1965）、荒木猛「話本」と「金瓶梅」（『長崎大学教養部紀要（人文科学編）30-2、1990→『金瓶梅研究』思文閣出版、2009 再録』など。
- (16) 日下翠『『金瓶梅』作者考』（『中文研究集刊』創刊号、1988）
- (17) 志村良治「豪商と淫婦—『金瓶梅』の世界—」（『中国小説の世界』評論社、1970）
- (18) 前掲注（4）参照
- (19) 田中智行『『金瓶梅』の感情観—感情を動かすものへの認識とその表現—』（『日本中国学会報』第五十七集、2005）